

病弱児のためのキャリアデザイン はじめの一步

～自己実現を目指すICT活用～

キーワード 病弱 遠隔授業 バーチャル体験 キャリアデザイン タブレット端末

学校名 福井県立福井東特別支援学校

所在地 〒910-0846
福井市四ツ井2丁目8-1

ホームページ
アドレス <http://www.fukuihigashi-sh.ed.jp/>

1. 研究の背景

本校は、慢性疾患、精神疾患、小児がんなど急性疾患などの病弱者や医療的ケアの必要な重度・重複障害のある肢体不自由者を教育領域としているが、近年、重度の精神疾患や発達障害の二次障害などにより、長期間不登校状態にあった生徒や、人との関わりに拒否感を抱いて集団での学習が困難な生徒の増加が顕著になってきた。本校では文部科学省の実践研究事業として平成27・28年度の2年間にわたり、特別な支援を必要とする生徒に対するICTを用いた指導について実践を積み重ねてきた。キャリアデザインの一環として産業現場等における実習中にインターネット通信を使って、実習先からの中継や在宅ワークの中継などの遠隔授業も行ってきた。その中で見えてきたことは、本県では病弱の生徒が働ける職場が限られていること、発達障害や精神疾患への理解が進んでおらず、本校の生徒を積極的に採用しようという企業が決して多くはないという現実がある。一方で、本校の生徒たちの中には、心身の状態から小中学校での職場見学や職場体験に参加できなかったために勤労観や職業観をもてず、就労意欲自体が低く社会へ出て仕事を中心とした人生を設計することが難しい者や、マスコミやウェブから得た就労のイメージしかなく現実とはかけ離れた理想を掲げる者も多くいる。また、意欲はあっても実際の仕事内容や流れが分からず、実習中に緊張や不安から体調不良になる生徒もいる。しかし、病弱の生徒であっても機会とサポートさえ与えられれば、社会の一員として役割を果たすことも可能である。インターネットを利用して、在宅ワークという選択や、ブロガー、ライター、イラストレーターなど、時間と場所に縛られずに仕事を行うノマドワーカーとしての選択肢も広がる。本校の生徒にとって、インターネット通信は、将来の可能性に繋がる重要なツールである。

2. 研究の目的

本研究では、十分に配慮され整えられた環境の中で、与えられた課題に取り組むだけでなく、生徒のキャリア発達を支えるための第一歩として、生徒自らが課題を見つけ、その解決に向けて様々な手段を活用しながら主体的に関わる学びの場を設定する。そして生徒が思い描く就労先、生徒が興味関心をもつ就労先などに、教師が実際の現場に入り込んで遠隔で働く人の声を聞きながら、自分の周辺の小さな社会を越えた世界をライブで感じさせたい。その中で必要な情報を得ながら心理的な距離を縮め、実際に現地へ赴き体験する、あるいは実際に外向かないまでもインターネット通信により場所を越えて体験すること（バーチャル体験）で、得た情報や体験からイメージを修正し卒業後の自己実現のイメージを構築できるようにしていくことを目的とする。

3. 研究の経過

時期	取組内容	評価のための記録
4月	<ul style="list-style-type: none"> 対象生徒の決定と実態把握（事例①） 対象生徒のキャリア教育年間計画立案 	チェックシート (生徒・保護者)
5月	<ul style="list-style-type: none"> 対象生徒との前期産業現場等における実習に向けての話し合い キャリアデザイン授業① 「夢をかなえるノートをつくろう！」 	進路希望調査（生徒） 夢をかなえるノート (生徒)
6月27日 ～7月7日	<ul style="list-style-type: none"> 春の産業現場等における実習 バーチャル職場見学 ①関係機関からの遠隔授業 	実習日誌 記録・写真（生徒）
6月6日	○アーティスト（ツヅリ・ヅクリ：東京）	インタビュー調査 (生徒)
6月16日	○漁業（定置網漁：福井市茶崎漁港） ・校内授業研究会の実施、研究助言者招聘	アンケート調査（教師）
6月23日	②実習先職員または卒業生および実習生との遠隔授業 ○就労継続支援B型事業所福授園農園（卒業生就労先）	記録・写真（生徒） インタビュー調査 (生徒)
6月28日	○就労継続支援A型事業所ネクステクノ（実習生）	
6月29日	○就労継続支援A型事業所水野製作所（卒業生・実習生）	
7月	<ul style="list-style-type: none"> 対象生徒の産業現場等における実習評価及びキャリア教育年間計画修正 	現場実習事後アンケート（生徒） 実習評価表（事業所）
7月14日	<ul style="list-style-type: none"> キャリアデザイン授業② 「春の現場実習を振り返ろう！」 	夢をかなえるノート (生徒)
9月	<ul style="list-style-type: none"> 対象生徒との後期産業現場等における実習に向けての話し合い 	進路希望調査（生徒） 夢をかなえるノート
10月24日 ～11月10日	<ul style="list-style-type: none"> 秋の産業現場等における実習 ①関係機関からの遠隔授業 	実習日誌（生徒） 記録・写真（生徒）
10月13日	○農業（ナシ園：就労継続支援B型事業所ピアファーム）	インタビュー調査 (生徒)
10月23日	<ul style="list-style-type: none"> 校内授業研究会の実施、研究助言者招聘 ○アーティスト（ツヅリ・ヅクリ：東京） 	KJ法による所感（教師） インタビュー調査 (生徒)
11月	<ul style="list-style-type: none"> 対象生徒の産業現場等における実習評価及びキャリア教育年間計画修正 	現場実習事後アンケート（生徒） 実習評価表（事業所） 夢をかなえるノート (生徒)
12月8日	<ul style="list-style-type: none"> 産業現場等における実習報告会 キャリアデザインアンケート調査 校内授業研究会の実施、研究助言者招聘 	プレゼンテーション (生徒) アンケート調査（生徒） アンケート調査（教師）
1月19日	<ul style="list-style-type: none"> 今年度の実践研究発表会、研究助言者招聘 	実践報告（実践者） アンケート調査

4. 代表的な実践

①対象生徒について

Aは高等部2学年の男子生徒で発達障害に基づく社会性の障害、コミュニケーション障害に加えて書字障害および強迫性障害がある。基本的な生活習慣は身に付いており欠席もほとんどない。今年度は集中して授業に取り組む時間が徐々に長くなり安定してきた。しかし、定期考査や現場実習等の行事が近づいたり、自分のこだわりを他者に否定されたりすると、不安が募って大きな声を出したり足をばたつかせたりするなどパニックになることがある。進路については、1年次にはAも保護者も一般就労を希望し、希望進路先は清掃、製造もしくは地元公務員という現状からはかけ離れた進路希望であったが、2年次になると保護者は福祉的就労に変更した。1年次の進路指導や学習活動などにより、一般就労への強いこだわりや障害福祉サービス利用に対する抵抗感が弱まり、Aにとって無理のない実現可能な方向へと意識が変わってきたと考えられる。またAの意欲や保護者の願いをふまえて、今年度より公共交通機関の利用を新たに目標として追加した。

②実践内容

(a) バーチャル職場見学（漁業編：福井市菜崎漁港）

タブレット端末を用いた遠隔授業で、生徒と教師が定置網漁船に乗って漁業体験をしている様子や水揚げから市場への出荷まで一連の作業の中継を行った（図1）。あわただしい状況が中継されるが、Aは、黙って視聴しているものの興味を示さず、「夢をかなえるノート」の職業インタビューシートはほとんど白紙のままであった。

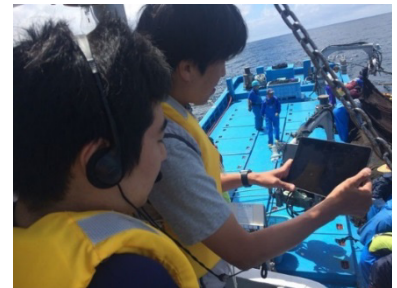


図1 定置網漁船からの中継

(b) バーチャル職場見学（卒業生の職場見学編：就労継続支援B型事業所福授園農園）

卒業生の就労先から、卒業生がレポーターとなって農園から中継を行った。Aは、別クラスの授業であるにもかかわらず参加を希望した。Aは元来、土や水といった自然に触れることが好きであることから、非常に興味深げに中継を視聴し、積極的に質問も行った。「夢をかなえるノート」の職業インタビューシートは余白を埋め尽くすほどびっしりとメモが書かれていた。

(c) 産業現場等における実習（春）

春の現場実習は、就労継続支援A型事業所水野製作所にて実施した。単独での現場実習はAにとって初めての経験であったため、勤務時間を配慮して10時から12時までの短時間勤務を4日間実施し、軽作業や梱包作業を担当した。最初は作業手順や注意事項をなかなか理解できず、不安のあまりパニックを起こすことがあったが、徐々に理解が進み、実習後半は服薬や休憩を挟みながら自分なりのペースで作業を進めることができた。

実習中、Aはこの事業所を利用している卒業生とともに校内にいる生徒に向けて遠隔中継を行った。初めての体験だったため質問の回答に戸惑う場面もあったが、卒業生にフォローされながら自分なりにきちんと回答することができた。事業所の評価では、挨拶や言葉遣い、指示の理解が高く評価された一方、仕事の正確さの評価が低く、総じてビジネススピードへの適応や仕事の正確性に困難さがあるため一般就労は厳しいという評価であった。

(d) 校外学習

9月、Aはコースの仲間とともにピアファームの観光農園にて校外学習を行った。ナシやブドウの収穫体験や試食を楽しむとともに、収穫作業の魅力や大変さも体感することができた。

(e) バーチャル職場見学（農業編：ピアファーム）

ピアファームが営んでいるナシ園へ生徒3名が出向き、タブレット端末による遠隔授業で農業や農福連携について説明を行った（図2）。さらに、ナシ園で作業をしている施設利用者にインタビューをして、作業の様子とともにレポートした。Aはレポーターとして現地へ赴き、事業所職員に質問をしたり利用者が作



図2 ナシ園からの中継



図3 学校での様子

業している様子を実況したりした。利用者がトラクターを運転している様子や重いコンテナをトラックに運搬する利用者の姿を見て、Aはやや不安そうではあったが、農業の苦労や魅力をレポートしようと努力していた。また校内で聴講した生徒からも、工賃ややりがいなど就労に関する質問があった（図3）。

(f) 産業現場等における実習（秋）

秋の現場実習は、農業ボランティアや校外学習などで利用したピアファームにて実施した。春の現場実習の成果をふまえて、勤務時間は10時から15時までのほぼ通常勤務を7日間実施した。Aの主な作業は台風で落ちたナシの収穫、運搬および袋詰め、事業所の大掃除などであった（図4）。Aはおおむね落ち着いた状態で1日も休むことなく過ごし、与えられた作業を指示通りきちんとこなすことができたため評価も高かった。さらに利用者とともに昼食を食べたり、事業所所長や職員と何気ない会話をしたりす



図4 実習の様子

るなどコミュニケーション能力も評価された。また、今回は公共交通機関による通勤練習も初めて実施した。初日のみ教師が引率したものの、残り6日間は本校最寄り駅から事業所まで乗り遅れや乗り過ごしをすることなく、徒歩区間を含めて一人で通勤することができたことも自立に向けて大きな一歩となった。

③まとめ

Aは本校入学前より土や水といった自然が好きだった。今年度に入って、週4時間の畑作業学習や春秋の現場実習、校外学習など自然の中での学習機会が大幅に増加し、就労や農業に関する興味・関心が活動するたびに強くなっていった。その中で遠隔授業の取組もキャリアイメージを高める一つの手段として効果的であった。

5. 研究の成果

自分の仕事や人生のプランを自ら学び、考え、行動し、自ら決定する力を育てたい。そのため、将来の「なりたい自分」を想像する。次に「なりたい自分になった後」を想像する。そして目標達成の時期を決めて、目標達成に必要なスキルを拾い出し、なりたい自分に対してどのような点が足りていないか、今後伸ばすべき能力は何か、必要なスキルを身につけるためにどうするかを考える。それから目標達成に必要な具体的な行動をとっていくなどのステップが必要とされる。本校ではこれまでも、キャリア教育の中で指導を行ってきたが、第一段階の「なりたい自分」の想像でつまづく生徒が多いのが現実である。今年度の実践では、一人一人の生徒が、「夢をかなえるノート」を作成することで、自分のこれまでの歩みを振り返り、今の自分を知り、将来の自分、なりたい自分をイメージすることが徐々にできるようになってきている。また、タブレット端末を活用した遠隔授業で、漁業、農業、アーティスト等の職業・職場、卒業生の就労先、在校生の産業

現場等における実習先をバーチャル体験した。漁業やアーティストという職業は、現在の生徒にとっては現実的な職業とは言えないが、教室に居ながら、様々な職業の存在を知ったり、現場の臨場感を味わったりすることができた。また、見掛けでは分からない苦労や楽しさがあることを知る機会になり、作業の手際良さ、体力の必要性を感じたり、自分も頑張らなければという意気込みを語ったりする生徒が現れた。さらには、見学や体験をしたい職場があったり、卒業後の進路について少しイメージができた生徒も多く、そのために学習学力の向上、体力の向上、作業能力の向上、生活習慣や健康の改善、コミュニケーション力の向上など、身につけなければならないことがたくさんあることを理解したりした生徒も多い（図5）。

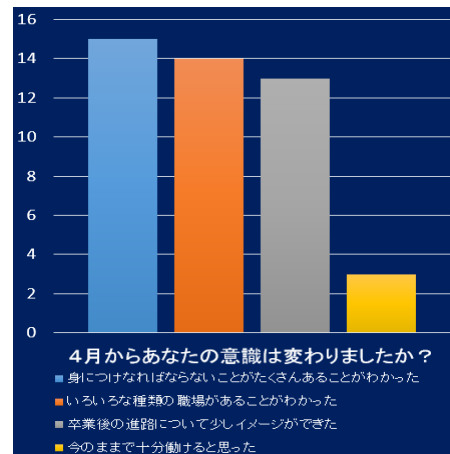


図5 アンケート結果より

また、遠隔授業で主に活用したタブレット端末は、機動性が高く、操作も容易であることから、本校では様々な授業の中で活用している。船上や農園、作業場などのバーチャル職場体験では、タブレット端末の特性を活かしたことで時間と場所を超える（ユビキタス）ことが可能になったこと、受信する側との双方向でのやり取りが行われたことが有意義であった。さらに、「知らない不安」「先が見えない不安」を抱える生徒にとっては、レポーター役を生徒や卒業生が行うことで、よりリアルな体験レポートになり、働くことや職場への心理的距離が近づいた。一人一人の生徒が抱える状況は異なっても、ある者はバーチャル職場見学により、ある者はレポーターやカメラマンとしての参加により、またある者は産業現場等における実習生として「仕事」に接することができた。さらに、生徒間で、お互いの実習先や学ぶべきことなどについて調べ合ったり助言し合ったりする場面も見受けられるようになり、話し合いを通して仕事に就くために必要なスキルを考えるようになってきている。

6. 今後の課題・展望

①「夢をかなえるノート」の改訂

キャリアデザインは、自分を振り返ることから始まり、日々積み上げていくことが大事である。しかし、自由記述ではノートに記入できない生徒がいるため、ワークシートの一部に選択肢を入れるなど様式の改訂を行う。

②遠隔授業

本校の生徒についての理解が概ねなされている就労継続支援事業所とのやり取りが多く、発達障害や精神疾患等のある生徒を対象にした病弱教育の理解啓発を勧めること、卒業後の進路選択の幅を広げることに至っていないため、次年度は、一般企業を含めた様々な職場との連携を試みる。

③授業に入れない生徒、興味を示さない生徒への支援

集団での授業に入ることができない生徒への支援として、中継を別教室に一斉配信することや、録画を視聴できるようにライブラリー化を行う。また、中継を視聴していても、就労への興味を示さない生徒への支援として、中継先と同じような活動を部分的に取り入れたり、中継先との協働作業を取り入れたりする。

④ICTの活用

通信状態の変化やICT機器のトラブルに対して、携帯電話などの別回線を用意したり、音声途切れてもやり取りできる文字ボードや身振りサインを用意したりするなど、バックアップ体制の整備を行う。

7. おわりに

振り返れば、本校の遠隔授業は、3年前の入学式当日、保護者の車から降りることのできない生徒に2台のタブレット端末を使ってSkypeで入学式を生中継したことから始まった。その後、入院生の前籍校、精神疾患等の対人関係に課題のある生徒の自宅、校外活動等での活動場所と学校を映像でつなぐことで、学校や集団に対する心理的距離が近づき、「学校」を意識して活動に参加することができる生徒が増えた。すなわち遠隔授業は、家から出たくない、出られない、学校に来ることができないなどの特別な支援の必要な生徒にとっては、それぞれのニーズに対応し、多様な学習方法や学習の場を提供する上では有用な方法であり、学びの機会と経験を拡大させる可能性があった。今回の研究では、高等部の生徒を対象としたキャリアデザインの第一歩として、遠隔授業としてバーチャル職場体験、現地レポートなどを取り入れてきた。しかし働くことの厳しさが前面に出ることが多く、協働して何かを成し遂げたり、作り上げたりするような、生徒の心をわくわくさせる取組が不足していた。次年度はこの点を十分に考慮し、「働く＝辛いこと、大変なこと」ではなく、「働く＝楽しい、うれしい」と生徒が感じられるような仕掛けを作っていく予定である。

8. 参考文献

- ・ICTを活用した教育の推進に関する懇談会（平成26年8月29日） 「ICTを活用した教育の推進に関する懇談会」報告書（中間まとめ）
- ・『学校と企業と地域をつなぐ新時代のキャリア教育』長田 徹、清川 卓二、翁長 有希 東京書籍 2017年
- ・『自立活動 de ライフキャリア教育』 渡邊 明宏 明治図書 2015年